

---

# 大福と私

山口

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大福と私

### 【Nコード】

N2038M

### 【作者名】

山口

### 【あらすじ】

大福の分際で、人間様に逆らおうなんて！

## 一話

音大から帰宅する途中、私は高村楽器店に立ち寄った。

この楽器店はとても広く、常に十台以上のグランドピアノが展示されている。その他に家庭用のアップライトピアノや電子ピアノもあり、合わせれば三十台にはなるだろう。

その他の楽器も売っており、楽譜や楽典も置いてあるのだが、私の興味はグランドピアノだけに注がれていた。なんと言っても品揃えがすごい。スタインウェイやベーゼンドルファー、ベヒシュタインといったブランド物がずらりと並んでいるのだ。しかも、その中でも値段の高い機種を揃えており、中には一千万を超える物もある。さらに、この店では自由に試弾することができるので、それらを弾き比べることさえ可能だ。

よほどの金持ちでない限り、そんな物は買えない。これらは客寄せなのだろう。私もまた、その甘美な香りにひき寄せられてきた一人だ。暇なときは、ここに立ち寄り弾かせてもらっている。そのくせ何一つ商品を買わないのだから、店員にはさぞ図々しい女だと思われるだろう。でも知ったことではない。

初めてこの店に来たとき、店員に購入を勧められた。しかし、私はすげなく断った。すでに持っているし買い換えるつもりもない。次に来たときも勧められたが断った。三回目になるとさすがに諦めたらしく、もう近づいてこなくなった。私がピアノを弾くことにしか興味がないことを悟ったのだろう。

この店に来るのは、もう十回以上になる。「今日も店員は来ないだろうな」と思いながらピアノを弾いていると、意外にも三十歳前後の男性店員が近づいてきた。そこで私は演奏をやめ、椅子に座ったまま彼を見上げて言った。

「ご迷惑でしたか？」

すると、店員は笑顔を浮かべて手を振った。

「とんでもございません。こちらこそ演奏のお邪魔をしてしまい、大変申しわけありませんでした」

店員は深々と頭を下げた後、さらに続けた。

「お客様は本当にピアノが上手ですね」

お世辞など嬉しくもなかったが、一応頭を下げておいた。もつとも、彼は本心からそう言ったのかもしれない。私は五歳の頃にピアノを習い始め、旅行や病気のとき以外は毎日欠かさず練習してきた。ピアノ歴は十五年。よほど才能のない人間でなければ、上手になるのも上手だと思われるのも当然だ。

店員は笑顔を浮かべたまま、一枚のチラシを差し出した。

「今月の二十五日に、発表会を開催致します。お客様も参加されませんか」

私はチラシを受け取り、じっくりと眺めた。一月二十五日、姉川市民文化会館大ホールにて開催。主催は高村楽器姉川店。参加料は一万五千円、使用機種はスタインウェイD274。

ちなみに発表会は、普段の練習の成果を披露するだけのイベントだ。コンクールのように順位をつけられて表彰されるわけではない。

「どういった人たちが参加するんですか」

「主に、当店が運営しているピアノ教室の生徒さんです。その他は募集に応じてきた方々で、詳しくはわかりません」

「生徒って、趣味でピアノを習っている人たちですか」

「はい、専門的に習っている方はいらっしゃいません」

## 二話

音大でピアノを専攻している私から見れば、そんな人たちのレベルなど知れたものだ。わざわざ参加する気にはなれなかった。

「せっかくですけど、興味ないです」

チラシを突き返すと、店員は肩を落とした。

「これほどの実力を持った方なら、生徒さんたちのいい模範になってくれると思うのですが」

彼が店の奥へ戻っていくのを見て、私はピアノに向き直った。再び演奏を始めようとすると、店の入り口の自動ドアが開いて若い女性が入ってきた。

私は彼女を凝視した。どこかで見たことがあるような気がしたのだ。年齢は二十歳前後に見える。私と同世代で性別も同じだが、見た目は大きく違う。私は痩せ型で長身、色黒の肌をしており、彼女はぽっちゃり型で背が低く色白である。あの透き通るような白い肌と、丸々とした顔と体はなんとも印象的だ。さわったらやわらかそうな気がする。一言で表現するなら大福に近い。

会ったことはないと思うのだが、どこかで見た記憶がある。それとも、よく似た人を見ただけかもしれない。どうしても思い出せずにじろじろと見ていると、大福女も視線に気づいてこちらを見た。私は慌てて目をそらした。いずれにしろ、思い出せないくらいだから重要な人間ではないのだろう。そう割り切り、気にしないことにした。

私は再びピアノを弾き始めた。しばらくしてから演奏をやめると、大福が店の奥で店員と話している声が聞こえてきた。

「今年も発表会をやるんですか？」

「はい。現在、出場される方を募集しております」

「また出ようかな」

「ぜひお願いします。塚本様が出場されれば、大盛況間違いなしで

す」

お世辞にも限度がある。素人の発表会に出るくらいだから、彼女はプロではないのだろう。一曲弾いただけで大盛況になる理由を教えてもらいたいものだ。私は二人のやり取りに興味を持ち、立ち上がって店の奥をのぞいてみた。店員におだてられた大福は、笑顔を浮かべながら大げさに手を振っている。「いい気になるんじゃないわよ」と叫びたくなった。

彼女はひとしきり談笑した後、チラシを受け取り店から出ていった。私はそれを見て、「ああいうのが、おだてられて発表会に出るわけね」と思った。たいして実力もないのに、自分の演奏が素晴らしいものであると思い込んで披露する。見にくるのはせいぜい家族や友人くらいだろう。結局は下手の横好き、素人の自己満足だ。どうせなら腕を磨いてコンクールにでも出ればいいのに。

ここで一つの考えが浮かんだ。私が出場して、そういう連中の度肝を抜いてやるというのはどうだろう。自分とて学生の身だが、それでも自分の実力すら量れない素人とは比較にならない。一万五千円は惜しいけれども、皆の驚いた顔を見ることができるのなら払ってもいい気がする。

私は、はやる心を抑えながら店員に声をかけチラシを受け取った。

### 三話

それから三週間が経過し、発表会当日になった。

長い廊下を通って楽屋に入ると、三人の出演者が横一列に並んで座っていた。手前に大福、その隣に茶髪の男子高生、一番ステージに近い奥の席に小太りで中年の男性。男性二人は神妙な面持ちで演奏に耳を傾けており、大福は目を閉じて聴き入っていた。

私は大福の隣に座り、彼女が目を閉じていることをいいことにじつくりと観察してみた。衣装は青いカクテルドレスで、私の真紅のドレスとは対照的だ。耳には銀のイヤリングをつけ、足には白いハイヒールを履いている。あの靴ではペダルが踏みづらいのではないかと思うが、短い足を長く見せるためには仕方がないのかもしれない。

さらにじろじろと眺め回していると、さわやかな香りが鼻をくすぐった。どうやら香水をつけているらしい。透き通るような匂いが水を想像させる。特徴から考えるに、おそらくブルガリの香水だろう。

ちなみに私は、ティアリー・ジュエルという香水を愛用している。香りがはつきりしており、目立ちたがりにはうってつけた。真紅に輝くハート型のボトルも気に入っている。まさに、私のために作られたような香水である。

そのとき、突然大福が目を開いた。私が驚いて目をそらすと、彼女はにこやかに話しかけてきた。

「佐伯さんですね？」

私はどきまぎしながらうなずいた。

「なんで私の名前を」

「プログラムに書いてありますから。私の後に演奏する人は佐伯さんしかいません」

「ああ、なるほど」

私は深くうなずきつつ、内心焦っていた。実はプログラムをろくに見ていない。自分がトリであることを確認しただけだ。こんな発表会で誰が何を弾こうがどうでもいいと思っていたからである。それを知られて白い眼で見られるのは嫌だったので、話題を変えることにした。

「綺麗な色のドレスですね、つい見とれてしまいました」

「佐伯さんのドレスの方が綺麗ですよ。しかもすごい美人だし、いいなあ」

確かに私はよく「美人」と言われるが、陰では「性格ブス」とも言われている。大福は見た目が悪いが性格はよさそうだから正反対だ。そう思いながら、私は心にもないことを口にした。

「美人でもなんでもないですよ、あなたこそ本当に綺麗です」

「ありがとうございます。全身で水を表現したかったので、寒色系でまとめてみました」

大福は何を弾くのだろう。水に関係する曲と言えば「水の戯れ」や「水の精」などが挙げられる。ひよっとしたら「大洋のエチュード」あたりかもしれない。的を絞れず悩んでいると、再び話しかけられた。

「佐伯さんは、高村楽器店の生徒ですか」

「いいえ」

「じゃあ、他の教室で習ってるんですか」

「はい。通常のレッスンではなく、特別な講師について専門的なレッスンを受けています。あと、音大で専攻してます」

すると、大福は目を丸くしながら私を見つめた。

「すごいですね、なんでこの発表会に出ようと思ったんですか」



## 四話

私は答えに詰まった。まさか「レベルの違いを見せつけるため」とは言えない。そこで、適当にごまかすことにした。

「今回使われるピアノがスタインウェイのD274だからです。こんな一級品を弾ける機会はなかなかないですよ。値段は大体、二千万くらいかな」

「そんなこと、よく知ってますね」

彼女は目を見開きながら「すごい、すごい」を連発した。どこまでそう思っているのか怪しいものだ。

やがて演奏が終わり、小太りの中年がステージに出ていった。彼は何を弾くのだろう。耳を澄ましていると、場内アナウンスが聞こえてきた。

「二十八番、坂井政輝。超絶技巧練習曲第四番『マゼツパ』二短調」  
私が「えっ」と声を上げた途端、周囲の視線が集まった。恥ずかしさのあまりうつむいていると、大福に声をかけられた。

「どうしたんですか」

「ちよつと驚いちゃって。まさかマゼツパを弾く人がいるなんて」  
「プログラムを見てないんですか」

肩をすぼめながらうなずくと、大福はにっこりと微笑んだ。

「それじゃあ驚きますよね、私もプログラムを見てびっくりしました」

マゼツパは超絶技巧練習曲の一つで、私でも弾きこなすのは難しい。普段子犬のワルツを弾いている中級者が、幻想即興曲の楽譜を見ると悲鳴を上げる。さらに、普段幻想即興曲を弾いている上級者がマゼツパの楽譜を見ると絶句する。そういうレベルの曲だ。

やがて、マゼツパの強烈なアルペジオが鳴り響いた。アルペジオは、分散和音の一種だ。普通「ドミソ」という和音があればそれを同時に弾くのだが、アルペジオはそれを「ド、ミ、ソ」の順番で一

瞬のうちに弾き流す。同時に弾くのではなく指をスライドさせるので、普通ではできない広範囲の和音を演奏することが可能になる。ちなみにマゼツパは、左右合わせて三オクターブの和音を一瞬で叩き出す曲となっている。

そのアルペジオが何度も続き、次に二ミリくらいの小さな音符で構成された音階がずらりと並ぶ。しかもそれだけにとどまらず、先に進むとさらなる難関がいくつも待ち受けている怖ろしい曲だ。私は以前これを弾いて、何度放り出しそうになったかわからない。

これだけの曲を弾くとは、ただの小太りではないようだ。私が感心していると、大福が再び口を開いた。

「この曲は、リストが『マゼツパ』という叙事詩に感銘を受けて作っただけですね」

「はい」

「彼は、パガニーニというバイオリニストの演奏に感動を受けたこともあるらしいです。『ピアノのパガニーニになる』という発言もしたとか」

「確かにリストの曲の中には、パガニーニに関する練習曲がありますね」

「ええ、彼はパガニーニに与えられた感動を自分の力にしていたんです。すばらしい話ですよ」

別にそうとも思わなかったが、私は適当に相槌を打った。それにしては大福ときたら、よくしゃべるものだ。出番が近いのに緊張しないのだろうか。

そのとき、彼女の手が震えていることに気づいた。やはり緊張しているらしい。きっと、それを紛らわすために必死でしゃべっているのだろう。私は、緩みそうになる口元を引き締めながら尋ねてみた。

## 五話

「やっぱり緊張しますか？」

「もちろんです」

「そうですね、うまく弾けなかったら残念だし」

「上手下手と言うより、聴きにきてくれた人たちを感動させられなかったら申しわけないと思って」

思いがけない彼女の言葉に、私は目を見開いた。

「感動？」

「ええ、私は聴く人を感動させるためにピアノを弾いています。佐伯さんは違うんですか？」

私は首を振った。ピアノを弾いているのは自己実現のためだ。いつか一流のピアニストになってステージに立ち、魅力的な自分を演出したい。

そう思っていると、大福は意外そうな表情を浮かべて私の顔をのぞきこんだ。

「佐伯さんは、誰かの演奏を聴いて強く感動したことはありませんか？」

私は自分の記憶をたぐってみた。そう言えば十歳の頃、塚本優子というピアニストのコンサートに行って深い感動を覚えたことがある。弾いていたのはドビュッシーの曲だ。彼女はでっぷりと太っている上に垂れ目で足が短く、とても美人とは言えなかったが、その指が繊りなす音色の美しさはプロの中でもトップレベルだった。

そのとき私は最前列にいて、演奏が終わった後に必死で手を叩いた。優子はそれに気づき、私に向かってにっこり微笑んでくれた。彼女はその後数ヶ月後に急逝してしまったが、その笑顔は今も心の中に残っている。

しばし思い出に浸っていると、大福が優しく微笑んだ。一瞬、その顔と優子の顔が重なった。そう言えば、二人はかなり似ている。

「佐伯さん。私は、他人の演奏を聴いて感動したことが何度もあります。それを、今度は他人に味わわせてあげたいんです」

私は、心の中で大福をあざ笑った。勝手に慈善事業をしていればいい。私は他人のためではなく、あくまで自分のために弾いている。聴衆のことなど二の次だ。せいぜい、演奏を聴いて驚いてもらえればそれでいい。そう思っていた矢先、突然演奏が止まった。

「やっちゃいましたね」

私が苦笑すると、大福は眉をひそめた。

「曲を忘れちゃったんでしょうか」

「たぶん。覚えてないなら楽譜を使えばいいのに、見栄を張って使わないから止まるはめになるんですよ」

「お気の毒ですね。せつかく今まで練習してきたのに、こんな結果に終わって」

「曲を忘れてしまったのは練習不足によるもので、同情の余地はないです」

その後数分間の沈黙が流れ、やがて拍手が沸き起こった。どうやら、小太りは最後まで弾くことをあきらめたらしい。悄然としながらステージを去る彼の姿が目につかび、私は必死で笑いをこらえていた。実力に合った曲を選べばいいのに、見栄を張るからこうなるのだ。身の程知らずもいいところである。

ふと横を見ると、大福がこちらを見つめていた。どうやら何か言いたいらしい。

なおも笑いをこらえていると、遂に彼女は口を開いた。

## 六話

「一生懸命演奏した人を笑うなんて、酷いと思います」

私は真顔になって、大福をにらみつけた。

「ちゃんと練習してこない方が悪いんでしょ、笑われて当然じゃない」

頭に血が上ってきたせいで、敬語を使うことすら忘れてしまった。元々気が短い方だ。親しくもない人間に突然文句を言われたら、相手が誰だろうが絶対に許さない。

大福は一瞬眉をひそめた後、大きなため息をついた。私はそれを見て、思わず彼女を怒鳴りつけた。

「何よ、その態度は！」

これ以上馬鹿にするなら、容赦なくひっぱたいてやる。見下されて黙っているつもりなどない。そう思っていると、大福はすっと目を細めてから満面の笑みを浮かべた。

「気にさわったならごめんなさい。私、もう行かないと」

彼女はゆっくりと立ち上がり、ステージの入り口へ歩いていった。私は肩透かしをくらい、呆氣にとられたまま後ろ姿を見送った。これはどうしたことだろう。楽屋を黒こげにするほど燃え盛っていた怒りの炎が、大福の笑顔一つで綺麗に鎮火されてしまった。まさか全身で水を表現するだけに飽き足らず、心まで水になりきっているとも言っのだろうか。そんなことをしたところでピアノがうまくなるわけでもないのに。

私は深く椅子に腰かけ、演奏に耳を傾けた。大福が入り口に立っているから、弾いているのは一つ前にいた茶髪の高校生だろう。聞こえてきたのはベートーベンのソナタ十四番「月光」の第三楽章だ。この曲は「悲愴」「熱情」「ワルトシュタイン」と並び、四大ソナタと呼ばれている。低音部から高音部まで一気に駆け上がる大迫力の音階と、陰鬱で深みのある独特の旋律、激しさの中にも繊細な美

しさを感じさせるフィナーレがすばらしい一曲だ。

だが、それだけの曲を選んでいるにも関わらず、彼の演奏は私の心に少しも響いてこなかった。速度は一定でミスもなく、楽譜の通りにきつちりと弾いている。確かに演奏自体は綺麗なのだが、「ただ弾いているだけ」という印象を受けるのだ。音大生や音高生に限らず、ピアノを趣味でやっている人たちの中にも上手な演奏をする人間はいる。しかし、彼らは「上手なだけ」であることが多い。曲に感情がこもっていないので、聴いていておもしろくないのである。私は自己顕示欲の塊なので、精一杯感情を込めて弾き自分をアピールする。真紅のドレスを着ているのも目立ちたいがためだ。ついでに言うと、曲は自分の魅力を高めるための手段に過ぎないと思っているので愛着などかけらもない。単に、自分を誇示するのに適したものを選んでいただけだ。「この曲が好きだから弾いている」という人に比べれば不純ではある。

やがて月光は華々しく終焉を迎え、その旋律は闇の中に消え去った。代わりに沸き起こったのが盛大な拍手だ。趣味でやっている人間にしてはよくできたと言っているだろう。

大福が出ていくのを見て、私はステージの入り口に向かった。ここからは演奏のようすがよく見える。その指の動きまで詳しく観察できるという点を考えると、ある意味特等席かもしれない。

客席の最前列には、さっきの小太りや茶髪の姿も見えた。大福の実力が彼らより上であることを祈るばかりだ。「人を感動させるためにピアノを弾いている」と言っただけには、相応の演奏を聴かせてくれなければ気が済まない。

## 七話

彼女が出ていってから間もなく、アナウンスが流れた。

「三十番、塚本麗奈。映像第一集第一曲『水の反映』」

なかなか生意気な曲を弾くものである。水の反映はフラットが五つも並び、楽譜を読むだけでも一苦労だ。しかも大部分が難解な和音と音階で構成されており、それに加えてこの上ないほど繊細な演奏が要求される。つまり、並大抵の腕では弾きこなせない。

ここで、心の中に一つの疑問が浮かび上がった。塚本という名字で、演奏するのはドビュッシーの曲。彼女は、名ピアニスト塚本優子と何か関係があるのだろうか。首を傾げていると、演奏が静かに始まった。

その瞬間、私は我が目を疑った。目の前に大きな湖が現れたのである。澄みきった湖の水には、麗奈の演奏する姿が映し出されていた。やがて波が起り、湖面が揺れた。鍵盤の上を滑る彼女の白い腕、それに伴って左右に動くふくよかな体、目を閉じながら微笑している顔。その一つ一つが、浮かんでは消えてゆく。

今まで発表会の会場にいたはずなのに、これはどうしたことなのだろう。冷静に考えてみて原因がわかった。これは大福、いや塚本麗奈の演奏によって、私の頭の中に湧き起こったイメージなのだ。今まで他人の演奏を聴いて心を動かされたことはあったが、こんな経験をしたことは一度もない。

彼女の演奏が激しくなったかと思うと、湖から水柱が上がった。水は四方八方に飛び散り日の光を反射しながら、輝く雨となって降り注いだ。

周囲を見回すと、そこにいたのは私だけではなかった。発表会の聴衆がずらりと並んでいたのである。湖面に見入っている老年の男性。目を閉じ、うっとり演奏に聴き入っている若い女性。興奮しながら母親の肩を叩いている男の子。そこにいる人すべてが、麗奈

の演奏に魅せられていた。その中には、先に出場した小太りと茶髪の姿もあった。二人とも、それなりに腕の立つ人間だ。しかし、彼らは完全に度肝を抜かれ、呆然としながら湖面を見つめていた。その表情から「自分とは格が違う」という言葉が伝わってくる。本来であれば、差を見せつけるのは私の役目だったはずだ。想定外だと言わざるを得ない。

やがて、湖の上にグランドピアノと麗奈の姿がはつきりと現れた。波はすっかり収まり、水面は空中に浮いている彼女を余すところなく映し出していた。

麗奈と初めて会ったときに「見覚えがある」と思ったが、それは間違っていたらしい。彼女ではなく、塚本優子を見たことがあるのだ。麗奈には、その面影がある。いや、それどころか、私には優子が生き返って演奏をしているようにすら見えた。きっと二人は親子なのだろう。弾き方も音色もそっくり同じだが、一つだけ違うのは鮮明な映像である。優子の演奏を聴いたときには、こんなものはなかった。

同じくらいの年齢なのに、これほどの差があるなんて本当にくやしい。今まで十五年間、必死で練習してきたというのに。目頭を熱くしながらうなだれていると、彼女の声が聞こえてきた。

「私は、聴く人を感動させるためにピアノを弾いています。佐伯さんは違うんですか」

麗奈を認めたくはなかった。きっと彼女は、優子の才能を受け継いだのだ。だからこれだけの演奏ができるのであって、本人が偉いわけではない。



## 八話

彼女の演奏は始まったときと同じように、静かに幕を閉じた。周囲に広がっていた映像は消え去り、同時に大拍手が沸き起こった。聴衆の一人一人が、「本当にいいものを聴いた」と言わんばかりの晴れやかな表情をしている。立ち上がって拍手をしている人さえいた。麗奈がステージから去り、楽屋に戻ってきた後も会場の拍手は鳴り止まなかった。その演奏は、聴衆に認められたのだ。

その盛大な拍手は、大きな重石となつて心にのしかかった。あれだけのものを聴かされて、これからどんな演奏をすればいいと言うのだろう。しかし、その気持ちをよそに場内アナウンスは流れてしまった。

「三十一番、佐伯綾華。超絶技巧練習曲第五曲『鬼火』変ロ長調」

私は、額に冷や汗を浮かべながらステージに出ていった。今まで幾度となくコンクールに出場したが、こんなに緊張したことは一度もない。椅子の高さを調節して座ってから、大きく深呼吸してみたが無駄だった。黒光りするピアノに描かれた金色のロゴマークも、目の前にずらりと並んだ白い鍵盤も、もはや恐怖の対象でしかなかった。

体の震えを必死に抑えながら、鍵盤に両手を乗せた。「鬼火」はお気に入りの曲で、一年以上も前からずっと弾いている。落ち着いて演奏すれば何の問題もないはずだ。大丈夫、私ならやれる。心の中で強く念じると、ようやく緊張がほぐれてきた。

今まで積み重ねてきた練習は、私を裏切らなかった。ミスらしいミスもなく、最後までスムーズに弾き通すことができた。上出来の部類と言えるだろう。

私は椅子から立ち上がり、ステージの前方の方へ歩いた。立ち止まり、聴衆に向けて深々と一礼すると、場内から拍手が沸き起こった。しかし、その大きさは大福と比べるべくもなかった。

私は失望の色を隠せなかった。別に勝負をしたわけではないし、順位をつけられたわけでもない。しかし、心の中は「麗奈に負けた」という気持ちで一杯だった。がっくりと肩を落としながら楽屋に戻ってくる、麗奈が笑顔を浮かべながら私を迎えた。

「佐伯さん、すばらしい演奏でしたよ」

普通なら、ここで「ありがとうございます」とか「それほどでもないです」と言っただけだろう。しかし、とてもそんな気分にはなれない。今の私の心を占めているのは、麗奈に対する激しい嫉妬だ。それを必死に押さえ込もうとしたが、無駄だった。自分の目尻がだんだんと吊り上がっていくのがはつきりとわかる。どうやら、もう限界だ。

遂に、私の感情が爆発した。

「あなたがすばらしい演奏をしたことは認めてあげる。でも、覚えておいて。それは塚本優子の娘であり、その才能を受け継いだからできたんだよ。あなたが偉いわけじゃない」

麗奈は目を見開いて私の顔を見つめた。

「私が、塚本優子の娘だということをご存知でしたか」

「知らなかった、見ればわかるよ」

目をむいてにらみつけると彼女は眉をひそめ、おずおずと口を開いた。

「私に才能があるかどうかはわかりません。ただ、一つ言わせてください。ダイヤモンドの原石は、加工しなければいつまでも原石のままです」

私は二の句が継げなかった。確かにその通りだ。いくら才能に満ち溢れていようが、それを磨いていかなければ輝かない。頭抜けた才能とたゆまぬ努力があつて、初めてその世界の頂点に立つことができる。一線で活躍しているプロのピアニストたちも、日々練習を重ねているからこそあんなすばらしい演奏ができるのだ。

## 最終話

おそらく麗奈も、今日のために相当な練習を重ねたのだろう。それが実を結んだ以上、彼女の努力は正當に評価しなければならない。勢いを削がれてしまった私は、別の角度から責めることにした。

「あなたは、他の出場者と比べ物にならないくらいの実力を持っている。さぞ愉快だったでしょうね。心の中で、自分より下手な人たちを見下して笑ってたんでしょ？」

すると、彼女は顔をしかめた。

「見下してなんかいません」

「私があなただったらそうするよ」

「私はしませんから」

彼女の言葉を聞いて、自分の口角が吊り上がっていくのを感じた。「ふうん、『あなたみたいな汚れた心の持ち主とは違う』とでも言いたいわけ？」

「そんな、汚れているなんて」

「そう思ってるくせに、何をいい子ぶってるの」

麗奈は深いため息をつき、私の顔をじっと見つめた。

「綾華さんは、ピアノを弾いていて楽しいですか？」

「何よ、いきなり。当たり前でしょ」

「さっきの演奏は、苦しんでいるように見えました」

私は思わず、彼女につかみかかりそうになった。

「あなたの演奏のせいでしょ、あれがなければ気持ちよく演奏して帰れたのに！」

「私があなたの立場だったら、気持ちよく演奏して帰りましたよ」

私は、ぽかんとしながら麗奈を見つめた。どうしたら、そんなことができると言うのだろうか。絶句していると、麗奈はさわやかな笑顔を浮かべながら口を開いた。

「音楽とは音を楽しむものであり、音を楽しませるものです。自分

と他人の優劣を考える必要などありません。自分の音を楽しみつつ他人を楽しませることができれば、それでいいんですよ」

私はようやく口を開いた。

「あなたは、ずば抜けた演奏をする人を見ても何も感じないわけ？」  
「そんなことはありません。素直に感動するし、いい部分は参考にさせてもらいます。母の演奏は本当に参考になりました。『彼女がいたから今の私がいる』と言ってもいいくらいです」

改めてじっくり見ると、麗奈の笑顔は優子とそっくりだった。当時十歳だった私に対して向けてくれた、優子の笑顔がそこにあった。やがて、楽屋の入り口に二十歳前後の女性が二人現れた。麗奈はそれに気づくと、私に向かって軽く頭を下げた。

「ごめんなさい、友だちを待たせてるので帰ります。また、どこかの演奏会でお会いできるといいですね。これからがんばってください」

麗奈は、透き通るような香りを残して立ち去った。

彼女の考えは甘いと思う。自分と他者を比較することは、己の立ち位置を確認することでもある。コンクールで優勝しようと思ったら、その全体的なレベルを把握することが不可欠だ。他人の実力を知り自分の実力を知ることこそが、頂点に立つことへの早道であると信じている。

しかし、考えさせられることも多々あった。自分は、音を楽しんでいるだろうか。ピアノを楽しんでいるだろうか。己の実力を誇示し他人を見下すことが、一体何を生み出すと言うのだろうか。

私は「優子が麗奈の体を借りて、大事なことを伝えにきてくれたのではないか」とも思った。もちろんそんなわけがないのだが、このめぐり合わせと麗奈の行動を思い起こすと、なんとなくそう思えたのだ。

麗奈の演奏は私の心を大きく動かした。それに対して、私の演奏は彼女の心に届いただろうか。もし届かなかったのであれば、もう一度逆転のチャンスがほしい。今度は必ず、彼女の心を動かす演奏

をしてみせる。

私は、強い決意を胸に抱きながらそこにたたずんでいた。(了)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2038m/>

---

大福と私

2011年6月25日22時25分発行